

教会形成における聖餐の意義 —カルヴァンの立場から—

三好 明

はじめに

本稿は、聖餐を重んじることが日本の諸教会の教会形成においてどのような意義をもつかということを考えるものである。筆者は改革教会の伝統に連なる者として、宗教改革者カルヴァンの立場からこの問題を考えたい。改革教会は教会形成において訓練を重んじる伝統を有しており、その伝統は改革教会の聖餐論と深く結び付いている。そして、改革教会における教会訓練と聖餐論を考える上で、カルヴァンの教会論が重要であることは言うまでもない。筆者は、カルヴァンの教会論、カルヴァンの聖餐論、カルヴァンの教会訓練という順序で、カルヴァンの神学における聖餐と教会形成について考察した後、今日の教会形成における聖餐の意義について論じたい。

1. カルヴァンの教会論

聖餐の問題を考える前に、教会とは何かということをよく考える必要がある。すなわち、カルヴァンの聖餐論を理解するためには、カルヴァンが教会をどのようなものとして理解していたか、すなわち、どのようなものとして信じていたか、ということを考えねばならない。カルヴァンの聖餐論が、『キリスト教綱要』第4篇の教会論の中に位置づけられていることからしても、この順序は妥

当であろう。そして、カルヴァンの教会論を理解するためには、カルヴァンの神学全体に目を配ることが求められる。渡辺信夫の『カルヴァンの教会論』は、そのようにカルヴァンの神学全体を把握しつつ教会論を論じている。筆者はカルヴァンの教会論の特徴として、契約共同体、終末共同体、聖餐共同体の三つの点を挙げるができることと考える¹。

(1) 契約共同体としての教会

日本の諸教会において、教会が契約共同体であるという意識は、どの程度まで浸透しているであろうか。筆者の牧会する教会に属する一人の年配の女性は、御子息がキリスト教の幼稚園に入ったことがきっかけとなり、その幼稚園を会場として開かれていた聖書の学びや日曜日の夕礼拝に出席するようになり、熟慮の末に約30年前に洗礼を受けてキリスト者となった。そして、洗礼を受けた以上は神様と契約したのだから礼拝を休む訳にはいかない、と言って今でも忠実な教会生活を送っている。しかし、現実にはこのような人ばかりではない。洗礼を受けるときは、それなりの思いでキリスト者として生きることを誓約するのであるが、年月の経過や事情の変化によってその思いは過去のものとなり、教会生活から遠ざかってしまう人々が少なくない。筆者の牧会する教会は、キリスト教主義の幼稚園においてなされた夕礼拝から始まったのであるが、上述の婦人と同じようにして幼稚園での伝道により洗礼を受けた成人の約半分は、教会から離れてしまっている。そのような人々にとっては、神と契約を結んだという意識は極めて希薄なのである。

カルヴァンは、教会を契約共同体として理解している。この契約が旧約と新約であることは言うまでもない。そして、カルヴァンは旧約と新約の一貫性を強調する。すなわち、旧約と新約の関係について、「全ての父祖の与った契約は、本質と事柄自体において我々のそれと何ら相違せず、全く一つであり同一である。ただ、処理の仕方〔アドミニストラティオ〕が違う」と述べるのである。

¹ 渡辺信夫『カルヴァンの教会論』増補改訂版（一麦出版社、2009年）、特に第1部・第5章「契約の民」、第6章「神の国」、第7章「終末に向けてある教会」、第2部・第12章「終末のしるし」、第13章「聖晩餐の受領」、第14章「聖餐共同体の形成」を参照。

旧約の信仰者も新約のキリスト者も、神との同一の契約関係にあると言う。その同一性とは、第一に、旧約の民も「肉的な豊かさと幸いではない」「不死の希望に選ばれられ」たということ、第二に、「彼らが、主と結んだ契約は彼らの功績によらず、ただ彼らを召した神の憐みにのみ懸かっている」ということ、第三に、「彼らを神と結び付け約束に与らしめる仲保者としては、彼らもキリストを待ちキリストを知っていた」ということである（『キリスト教綱要』Ⅱ・10・2）²。カルヴァンが旧約の信仰においても死を克服するものを見ていたことは、注目に値する。これは天上の生を切望するカルヴァンの神学全体の構造に関わることだからである。

もちろん、カルヴァンは旧約と新約の相違についても指摘をしている。第一に、旧約においては、神の民に対して天上の嗣業が「地上的な恵みという形のもとにそれを直視させいわば試食させることによって」示されていたのであるが、新約においては、「来るべき生の恵みは福音によってより明瞭かつ明快に啓示された」ということである（Ⅱ・11・1）。第二に、「旧約は実質〔ヴェリタス〕なきままでただ実体の代りに形あるいは影を指し示したのに対し、新約は現にある実質と堅固な実体を開示」したということである（Ⅱ・11・4）。第三に、旧約は「文字的な教え」であるが、新約は「霊的な教え」であるということである（Ⅱ・11・7）。第四に、旧約は「心に恐怖を生じさせる故に奴隸的契約」であるが、新約は「心を信頼と確信に高める故に自由の契約」であるということである（Ⅱ・11・9）。第五に、旧約においては恵みの契約が「一つの民族だけ」に局限されていたが、新約においては諸々の民族が神との和解へと招かれ「異邦人の召し」があるということである（Ⅱ・11・11-12）。

このように、カルヴァンは旧約と新約の相違についても十分に意識しているのではあるが、神の民がどのような恵みに与るべく召されているかという点については、旧約と新約の間に非常に強い同一性を見ているということをおぼろげに忘れない。カルヴァンは、「福音の教えが霊的で朽ちぬ命の所有に近づかせるもの」であり、福音が律法の内に約束されていたのであるから、旧約も「特に

² 以下、カルヴァンの著作からの引用は、ジャン・カルヴァン『キリスト教綱要』改訂版、第1・2篇、第3篇、第4篇（渡辺信夫訳、新教出版社、2007年、2008年、2009年）による。

来るべき生を指していた」のである、と明言する(Ⅱ・10・3)。そして、出エジプト記3章6節、マタイによる福音書22章23-32節などを例示しつつ、「神は彼らの神であることを証したもうのみでなく、いつまでもそうであると約束し、だから彼らの希望は現世の幸福に引き留められず、永遠にまで拡大される」と述べる(Ⅱ・10・9)。さらに、旧約の信仰者も終末の最後の審判を待ち望んだことを、多くの聖書箇所を挙げ示しつつ、「旧約の聖なる父祖たちは、神がその僕に約束されたことをこの世では稀にしか、あるいは殆ど実現したまわぬのを知っていて、それ故に心を神の聖所に高め、現世の影の下には顕れていないものがそこに隠されているを見た」と述べるのである。それゆえ、カルヴァンは、旧約の詩人の歌う「朝の光の出現」(詩30:5)についても、「この世の終末の後に来る新しき命の啓示でなくて何であろうか」と述べるのをためらわない(Ⅱ・10・17)。

そのみならず、カルヴァンは、旧約と新約の相違点を指摘する場合でも、「霊的な約束」が「地上的なものの象徴」によって啓示され、それが「天上の嗣業の予型〔テュプス〕」であったことを強調する。そのため、相違点が指摘されている場合においてさえも、カルヴァンは、旧約の啓示が「我々の遍歴する地上や地上的なエルサレムに向けられたのではなく、主がとこしえに祝福と命を定めておられる信仰者(詩篇133-3)の真の祖国、天上の都について言われたものであることを我々を見るのである」と述べて、旧約と新約の本質的一貫性を明らかにするのである(Ⅱ・11・2)。そして、その一貫性の基本は、天上の生という恵みへの召しにある。

このように、旧約と新約が一貫したものである以上、新約聖書の教会を理解するために旧約聖書にまでさかのぼるのは当然である。カルヴァンは、教会のかしらであるキリストの職務を、旧約聖書における預言者、王、祭司の三職であると理解する。そして、これらの三職を担うキリストによって建てられた神の民が教会であると考えるのである。すなわち、旧約聖書においてはこれらの職務は我々と同じような人間によって担われたのであるが、新約聖書においては、神であり人間であるイエス・キリストこそが、永遠の預言者、王、祭司であり、教会はこれらのキリストの職務を通して建てられ、教会はこれらのキリストの職務に参加するのである。

キリストは預言者としての職務において「御父の恵みの告知者・また証人」である。そして、キリストの預言者職は「彼の体全体に亘って福音の説教が常に為され、御霊の力がそれに伴うため」であるから、教会は福音の説教をなすことによって、キリストの預言者職に参加するのである(Ⅱ・15・2)。キリストは王としての職務において「教会の体全体」と「その肢体」を霊的に統治する(Ⅱ・15・3)。そして、「彼は我々をその力をもって武装させ、彼の麗しさと壮大さをもって装い、彼の富によって富ませたもう」のであるから、教会は「悪魔と罪と死に対し恐れなく戦う」ことによって、キリストの王職に参加するのである(Ⅱ・15・4)。キリストは祭司としての職務において「我々の罪責を拭き去り、罪のための償いを果たした」のである。それゆえ、教会は「彼において祭司とされ、己れと己の物の全てを神に捧げ」、「祈りと讃美の犠牲を」神の前に捧げることによって、キリストの祭司職に参加するのである(Ⅱ・15・6)。このように、教会はキリストによって建てられ、キリストの職務に参加する契約共同体であり、キリスト者はこの契約共同体の一員として天上の生の恵みに与るのである。

(2) 終末共同体としての教会

キリストの預言者、王、祭司としての職務は、一時的なものではなく永遠のものである。これらキリストの三職のうち、カルヴァンがその永遠性を最も強調するのは、王としての職務についてである。カルヴァンは詩編89篇35-37節を引用しつつ、神が「御子の手によって」「教会の永遠の支配者となり保護者となると約束しておられる」と述べる。また、ヨハネによる福音書18章36節によって「キリストは我々の希望を天にまで高めようとして、御自身の王権がこの世のものでないと宣言される」と記す(Ⅱ・15・3)。そして、「天上の王の主権の下に集められても、地上の生の状態を超え出た所に実りが確立されていない限り何の益があるか」と述べ、「キリストにおいて我々に約束された限りの幸いは」「天上の生にこそ本来存する」と断言する。さらに、「神の王国は義と平和と聖霊にある喜び」である(ローマ14:17)ことを述べつつ、以下のようにキリストの王国の齋すものを告白するのである。

ここで我々は、キリストの王国の齋すものが何であるかを手短かに教えることができる。それは腐敗に屈する地上的で肉のなものではなく、我々を永遠の生命にまで高める霊的なものであるため、たとえこの世の生が辛苦と飢えと寒さと侮蔑と恥辱、その他、様々の煩いの下にあっても、忍耐をもって生き抜き、我々の王が決して見捨てたまわず、窮乏に際しては助けて下さり、こうして遂に我々の戦いは終わって凱旋へと召されるに至るのだ、ということだけに満足する(Ⅱ・15・4)。

このように、カルヴァンにとって教会とは天上の生を約束された民から成るキリストの王国なのである。カルヴァンの神学において、神の民は天上の安息を目指してこの世を歩む民であるということは、一貫した主題である。十戒の第四戒の講解において、カルヴァンは「主日」の第一の意義が「主が御霊によって我々の内に働きたもうために我々は己の業からの恒久の安息を全生涯を通じて瞑想し続けること」であると述べる(Ⅱ・8・34)。そして、使徒信条の中のキリストの再臨を解説する際に、カルヴァンはキリストの再臨こそが神の民にとって希望以外の何物でもないことを力強く断言する。

ここに素晴らしい慰めが立ち現れる。すなわち、我々を御自身と共に裁く栄誉に与らせようと定めておられた方は、裁きに際して我々の味方であると聞くのである。彼が我々を罪に定めるために法廷に登ることは決していない。最も慈悲深い君主がその人民を滅ぼすだろうか。首が肢体を分散させることがどうしてあろうか。護民官が被保護民を断罪することがどうしてあろうか(Ⅱ・16・18)。

カルヴァンが教会をキリストの再臨を希求する民として理解していることは、先に述べた天上の生への熱望と深く結び付いている。カルヴァンにとって教会は終末を待ち望む終末共同体なのである。

教会が終末共同体であることは、カルヴァンが信仰について論じる場合にも、「信仰はこの世の生の長寿や栄誉や所有を約束するものではなく、」信仰の主要な確信が「来るべき生への期待」にあると論ずることからも明らかである(Ⅲ・

2・28)。そして、キリスト者の生活を論じるにあたって、キリスト者は誰もこの世においては完全ではなく、終末を目指して前進し続けるべき者であることを述べ、「まことに、全生涯の期間、問い続け求め続けてついに肉の弱さを脱ぎ捨て、神との全き交わりの内に受け入れられる時、我々は善そのものを獲得するであろう」と、天上の生への希望を表明するのである(Ⅲ・6・5)。

カルヴァンの『キリスト教綱要』の中でも、キリスト教的な生活が、自己否定(第3篇・第7章)、特に十字架を負うこと(第3篇・第8章)であることを説いた後に、「来るべき生への瞑想について」解き明かす第3篇・第9章は、赤木善光が述べるように「カルヴァンの人生観をあらわす典型的な文章」である³。この章の冒頭において、カルヴァンは「我々は何のような種類の艱難に圧迫されても、現世の生を軽んじ、それによって来るべき生への瞑想に駆り立てられるという目標を、常に思い見なければならない」と訴える。「現世の生を軽んじる」とは、「現世の生の空しさ」を神によって教えられ、認識することである。カルヴァンは極めて具体的に次のように記している。

そういうわけで、彼らが己れ自身に確固として安全なる平和を約束することがないように、あるいは戦争、あるいは暴動、あるいは略奪、あるいはその他の損害により、不安にさいなまれたり傷つけられたりすることを許したもう。飛び去り消え行く富を彼らが極度に渴望したりそれを所有したりすることに甘んじないよう、今は国外追放、今は大地の不作、今は火災、今はその他の方法で貧窮に引き戻し、あるいは少なくとも平均水準に留めたもう。彼らが結婚の幸福の内に余りにも楽しみに耽ることがないように、あるいは妻の邪悪によって苦しみ、あるいは悪事を為す我が子によって恥を負わせ、あるいは孤独に苦しませたもう(Ⅲ・9・1)。

しかし、神の民は、「現世の生をこのように軽んじはするが、この世を嫌悪したり神に対して忘恩となったりすることのないよう自らを訓練すべきである」とカルヴァンは述べる。「この世の生は全体として救いを推進するように定めら

³ 赤木善光『宗教改革者の聖餐論』(教文館、2005年)384頁。